第二十講　古文の読解⑤

Step 1

一　次の古文を読み、あとの㈠～㈣に答えなさい。

摂政殿参らせ給ひて（参上なさって）、廿一日の夜の月、いと心許なく待たせ給ふ程（たいそうじれったい様子で待っておられたが）、人々に「出でたりや（もう出たかね）」と問はせ給へば（お聞きになるので）、さまざまに様を変へて申すに、「山の此方へは出でながら（山のこちら側へはもう出ておりますが）光のいまだあらはれぬ（光がまだ届きませんで）」と申す人侍りしを（いましたのを）、「この申し様、念ありてさもあり（よく考えられていてなるほどと納得する）」など、人々も仰せられしかば、弁、

A　山の端にせめても月の遅き夜は此方と思ふもなほぞ待たるる

（「弁内侍日記」より）

（注）　摂政殿＝近衛兼経。
　　　弁＝弁内侍（作者）。

㈠　「あらはれぬ」を、現代仮名遣いで書き直しなさい。

(二) 「問はせ給へ」の主語を、次の1～4から一つ選び、記号で答えなさい。

1 摂政殿　2 人々　3 申す人　4 弁

(三) 「様を変へて」の解釈として最も適切なものを、次の1～4から選び、記号で答えなさい。

1 質問をわかりやすく改めて　2 服装を新しいものに替えて
3 場所をあちこちに移動して　4 返事をおもしろく工夫して

(四) Aの和歌のうち、上の句は「山から出る月の大変遅くじれったく感じられる夜は」と解釈できるが、下の句にこめられた「弁」の気持ちとして最も適切なものを、次の1～4から選び、記号で答えなさい。

1 申す人の「月は今夜はもう出ない」という意味の発言を受けて、もう待つのをやめた方がよいと思う気持ち。
2 申す人の「月はもう沈んでしまった」という意味の発言を受けて、本当かどうか信じられないと思う気持ち。
3 申す人の「月はもう近くまで来ている」という意味の発言を受けて、そうはいっても待ち遠しく思う気持ち。
4 申す人の「月はいつか出るだろう」という意味の発言を受けて、いつまで待てばよいのか不安に思う気持ち。

【山口県】

Step 2・3

二　次のAの文章は、『今物語』の一部で、藤原定家と藤原家隆についての説話の前半の現代語訳であり、Bの文章は、Aに続く部分の古文である。また、Cの文章は、Bの文章中にある二つの和歌の解釈である。この三つの文章を読んで、(一)～(七)の問いに答えなさい。

A　近年和歌の道は特にもてはやされているので、内裏（だいり）・院の御所・摂政（せっしょう）家など、いずれの場でもそれぞれに、詠歌の奥底まで極めていらっしゃった。臣下が大勢いらっしゃる中に、治部卿（じぶきょう）定家、宮内卿（くないきょう）家隆という人がいて、彼らは和歌の伝統が続く家で、和歌の道に名声を得ている人々であるから、この二人にはだれも及ばなかった。

（注）内裏・院の御所・摂政家＝ここでは、それぞれ、天皇、上皇、摂政家を中心とする歌壇のこと。
治部卿＝治部省の長官。
宮内卿＝宮内省の長官。

B　ある時、摂政殿、宮内卿を召して、「当時正しき歌よみ多く聞こゆる中に（現在正統的ナ歌人ガ知ラレテイル中デ）、いづれかすぐれ侍る（ダレガスグレテイルノカ）。心に(1)思はんやう、ありのままに」と御尋ねありければ、「いづれともわきがたく候（ドナタトモ判別シガタク存ジマス）」とばかり申して、思ふやうありげなるを（アリソウナ様子ナノデ）、「(2)いかにいかに」とあながちに（強イテ）問はせ給ひければ、ふところより畳紙（たたうがみ）を落として、やがて（ソノママ）出でにけり。御覧ぜられければ（御覧ニナッタトコロ）、

〈I〉　明けば又秋のなかばも過ぎぬべし
(3)かたぶく月の惜しきのみかは

と書きたり。この歌は治部卿の歌なり。(4)かかる御尋ねあるべし（アルダロウ）とはいかでか知るべき（ドウシテ知ロウカ）。ただ、もとよりおもしろくおぼえて、(5)書き付けて、持たれけるなめり（持ッテイタモノデアロウ）。

その後、又治部卿を召して、さきのやうに尋ねらるるに、これも申しやりたるかたなくて（申シ上ゲヨウガナクテ）、

〈Ⅱ〉かささぎのわたすやいづこ夕霜（ゆふしも）の
　　雲井に白きみねのかけはし

と、たかやかにながめて出でぬ（高ラカニ声ニ出シテウタッテ）。これは宮内卿の歌なりけり。(6)まめやかの上手（マコトノ名手）の心は、されば（コノヨウニ）一つなりけるにや。

（注）摂政殿＝政務を行う上での中心となる官職。
畳紙＝折り畳んで懐（ふところ）に入れ、和歌を書くことなどに用いる紙。
かささぎ＝カラス科の鳥。古来、文学上では、七夕説話の星の仲立ちをする鳥として知られる。
雲井＝大空。

C

〈Ⅰ〉の和歌の解釈

八月十五夜の今宵（こよい）が明けたら、秋の半ばも過ぎたことになるだろう。今傾く名月だけが惜しいのではない。

〈Ⅱ〉の和歌の解釈

あのかささぎが渡すという橋はどこにあるのか。この黄昏（たそがれ）に、山の峰に一面に降った霜が、天空に白くかかる橋のように輝くよ。

Step 2

(一)　――線部分(1)「思はん」の読みを、すべてひらがなで書きなさい。ただし、現代かなづかいでない部分は、現代かなづかいに改めること。

Step 2

(二)　――線部分(2)「いかにいかに」という言葉には、どのような気持ちが表れているか。具体的に書きなさい。

Step 3

(三)　――線部分(3)について、「かたぶく月」の他に何を惜しんでいるのか。Cの文章を踏まえて、十字以内で書きなさい。

Step 3

(四)　――線部分(4)「かかる御尋ね」とは何か。具体的に表している部分を、Bの文章中から三十字以内で抜き出し、そのはじめと終わりの五字をそれぞれ書きなさい。

はじめ

終わり

Step 3

(五) ――線部分(5)について、このようにしていた理由を、二十五字以内で書きなさい。

Step 3

(六) 〈Ⅱ〉の和歌を説明した文として、最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 七夕説話で、かささぎが架けるといわれている天空の橋を想像し、峰に降った霜と重ねあわせて詠んでいる。
イ 七夕の今日、七夕説話に登場するかささぎが、遠くの峰を目指して飛んでゆく様子を想像して詠んでいる。
ウ 冬の雪の中で、かささぎが天空に橋を架けるように連なって飛ぶという七夕説話のことを歌に詠んでいる。
エ 七夕説話の中で、天空に橋を架けるといわれるかささぎが、今、目の前を飛び去っていく様子を詠んでいる。

(七) ――線部分(6)は、具体的にどういうことか。AとBの文章全体を踏まえて、八十字以内で書きなさい。

【新潟県】

〈Note〉

第二十講　古文の読解⑤

Step 1

一

解答

(一) あらわれぬ　(二) 1　(三) 4　(四) 3

解説

(一) 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

(二) 月を「いと心許なく待たせ給ふ」という人が、月を待ちかねて「出でたりや」と尋ねている。「せ給ふ」は非常に高い尊敬の程度を表すので、本文で最も身分の高い人が主語となる。

(三) 「出でたりや」という質問に対する返事を、いろいろ様子を変えて申し上げるということ。

(四) 「なほ」は「やはり」という意味の語。月は「此方」と思っても、やはり待たれる、ということである。

口語訳

摂政殿が参上なさって、二十一日の夜の月をたいそうじれったい様子で待っておられたが、人々に「もう（月は）出たかね」とお聞きになるので、いろいろと返事をおもしろく工夫して申し上げる中に、「山のこちら側へはもう出ておりますが、光がまだ届きませんで」と申す人がいましたのを、「この申し方は、よく考えられていてなるほどと納得する」など、人々もおっしゃったので、弁は次のように詠んだ、

山から出る月の大変遅くじれったく感じられる夜は、山のこちら側へはもう出ていると思っても、やはり待たれることだ

Step 2・3

二

解答

㈠おもわん　㈡だれが優れているかをどうしても聞き出したい気持ち。（同意可）　㈢秋が過ぎ去ること。（同意可）
㈣（はじめ）当時正しき　（終わり）ぐれ侍る。　㈤以前から、「明けば又」の和歌に趣を感じていたから。（25字）（同意可）　㈥ア
㈦時代を代表する歌人である定家と家隆が、互いの和歌を認め合っていたように、優れた和歌を見極め、素直に認める心は、和歌の名手に一致しているものと思われるということ。（80字）（同意可）

解説

㈠語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
㈡「どうだどうだ」という意味で、摂政殿が「当時正しき歌よみ…いづれかすぐれ侍る」という質問についての答えを宮内卿に強く要求していることから考える。
㈢〈Ⅰ〉の和歌の解釈で、上の句の部分に注目。今宵八月十五日が明けたら、秋の半ばも過ぎる、そのことを惜しんでいる。
㈣摂政殿の宮内卿に対する質問を指している。
㈤治部卿の歌を「ただ、もとよりおもしろくおぼえて」というのが、その理由になっている。「もとより」は以前から、「おもしろし」は趣がある、の意。
㈥〈Ⅱ〉の和歌の解釈から読みとる。山の峰に一面に降った霜から、天空に白くかかる橋を想像し、かささぎが渡す橋という伝説を重ねあわせている。
㈦「当時正しき歌よみ…いづれかすぐれ侍る」という摂政殿の質問に対して、和歌の名手とされる宮内卿家隆と治部卿定家がそれぞれ相手の和歌をあげたことから、本当の名手は、このように相手を認め合うということで一致している、という考えを述べている。

口語訳

ある時、摂政殿が宮内卿をお呼び寄せになって、「現在正統的な歌人が多く知られている中で、だれがすぐれているのか。心に思う

ことを、ありのままに（答えよ）」とお尋ねになったところ、「どなたとも判別しがたく存じます」とだけ申し上げて、思うことがありそうな様子なので、「どうだどうだ」と強いてお尋ねになられたところ、ふところから畳紙を落として、そのまま退出してしまった。（摂政殿が）ご覧になったところ、

明けば又秋のなかばも過ぎぬべし　かたぶく月の惜しきのみかは

と書いてあった。この歌は治部卿の歌である。このようなお尋ねがあるだろうとはどうして知ろうか。ただ、以前から趣があると思っていて、書き付けて、持っていたものであろう。

その後、又治部卿をお呼び寄せになって、前の（宮内卿の）ときと同じように尋ねられたところ、これも申し上げようがなくて、

かささぎのわたすやいづこ夕霜の　雲井に白きみねのかけはし

と、高らかに声に出してうたって退出した。これは宮内卿の歌であった。まことの名手の心は、このように一つであることだ。